The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	資料：シエラレオネFGM事件における法人類学者の鑑定書 ： 英国移民難民上訴審判所AF対内務省大臣（2014 .1 .30決定）
Author(s)	安藤, 由香里; 猪口, 絢子; 栗山, 智帆 他
Citation	国際公共政策研究. 2015, 19(2), p. 129-144
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/55430
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〈翻 訳〉

資料：シエラレオネFGM事件における法人類学者の鑑定書

英国移民難民上訴審判所AF対内務省大臣

（2014.1.30決定）

Document: A Witness Statement of a Legal Anthropologist in the case of FGM in Sierra Leone

AF v. SSHD

(2014.1.30)

安藤由香里*・猪口絢子**・栗山智帆***・川口奈穂****

Yukari ANDO*, Ayako INOKUCHI**, Chiho KURIYAMA***, Naho KAWAGUCHI****

Abstract

Witness statements of legal anthropologists play a significant role in refugee cases in the U.K. This document aims to introduce how the tribunal takes into account witness statements in order to examine the country of information for the appellant. In this case, a legal anthropologist stated that Female Genital Mutilation (FGM) was a nearly universal practice among all ethnicities in Sierra Leone and that girls were in danger of being forced to undergo FGM if they returned to Sierra Leone from the U.K. The tribunal found the expert's report consistent with much of the background evidence.

キーワード：難民、FGM、出身国情報、シエラレオネ、法人類学

Keywords：Refugee, FGM, Country of Information, Sierra Leone, Legal Anthropology

* 大阪大学グローバルコラボレーションセンター特任助教
** 大阪大学法学部国際公共政策学科
*** 大阪大学大学院国際公共政策研究科博士前期課程
**** 大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程

はじめに

本資料は、英国移民難民上訴審判所AF対内務省大臣（2014.1.30決定）[1] に、法人類学者のバーバラ・ハレルボンド博士（以下、博士）が提出した鑑定書の翻訳である。法人類学は、社会的、文化的背景の異なる特殊な状況におかれた難民を正しく理解するために有益であり、法人類学者の鑑定書は、英国の難民事件において重要な証拠として用いられている[2]。

本決定では、シエラレオネに送還されると、娘が女性性器切除（Female Genital Mutilation: FGM、以下FGM）を強制される恐れがあることを理由に、母親である申立人が難民と認定されるかが争われた事件である。その決定にあたり、博士の鑑定書が重要な証拠となった。本決定文に、「博士が、専門家として鑑定書を提出し、正確な審議のために証人として出廷した。そして審判所は彼女の証言を受け入れた。」[3] と明示されている。

難民認定は、申請者の社会的、文化的背景を十分に検討する必要がある。しかし、日本では本資料のように詳細な出身国情報を網羅する専門家の鑑定書が提出されることは少ない。本資料を通して、出身国情報に関する鑑定書の重要性が認知され、今後の難民認定の一助となれば幸いである。

〔翻訳〕

AF対内務省大臣の事件におけるシエラレオネのFGMの危険性に関する鑑定書（2013年）

未成年の子ら１：CTとTT

両親：AFとSGT

能力証明

私は15年間シエラレオネと西アフリカで調査経験のある法人類学者だ。家族法、行政法、「伝統的」裁判による紛争解決を専門にしていた。1967-1982年、エディンバラ大学、ライデン大学アフリカ研究センター、ウォリック大学、アメリカン大学スタッフとして、幅広くシエラレオネについての論文を発表しており、本鑑定書の中で引用した。

1982-1996年、私はオックスフォード大学強制移住研究センターを設立し、センター長を勤めた。1997-2000年、ケニアとウガンダの法律家達とチームを組み、難民の権利に関する研究に取り組んだ。そして、ウガンダのマケレレ大学法学部で難民法プロジェクトを立ち上げ、難民のための法的支援をした。2000年、カイロのアメリカン大学で難民研究の大学院及びAMERA-Egyptという難民の法的支援NGO、並びに2003年にイギリス拠点のアフリカや中東の難民支援チャリティー団体

1） United Kingdom Upper Tribunal (Immigration and Asylum Chamber) AA/07910/2012&ors, Determination on 30th January 2014 (Unreported).
2） Good, Anthony. 2003. ‘Anthropologists as experts Asylum appeals in British courts’. *Anthropology today* 19 (5):3-7, p.3.
3） supra note n.i, para.30.

（AMERA）を立ち上げた。2009年から、ファハム難民プログラム「難民法律扶助情報」の長を勤め、情報交換の場の発展に取り組んでいる。

1996年、米国人類学会特別功労賞、2005年、OBE賞を受賞した。また、オックスフォード大学名誉副学長、名誉教授、クイーン・エリザベスハウス強制移住研究センターの創設者であり、そしてレディ・マーガレットホールの名誉研究員である。

私は難民認定された２事件で証人となったことがある。申立は、ナイジェリアやリベリアに送還されれば、娘にFGMを強制される恐れの訴えだった。現在、シエラレオネに送還されれば、娘にFGMを強制される恐れを訴えている他の事件の証人になっている。最近のシエラレオネのFGM研究を自身で調査すると共に、現地調査している多くの人類学者達にEメールで助言を求め、シエラレオネのFGM支持、不支持双方の活動家達にも連絡を取った[4)]。

自分の義務は審判所の決定のために中立的な専門家意見を提供することで、特定の人のためにではなく、審判所のためであると理解しており、本義務を遵守している。私の意見は私の考える真実であり、事実に対する専門的意見を表明している。イカリアン・リーファー事件と2010年２月10日の移民難民上訴審判所の実施通達で定められた「専門家としての証人」の遵守事項を読み、理解していることを宣言する。

私はAF及び彼女のパートナーであるSGTについて代理人から提供された書類を全て読んだ。2013年８月５日、オックスフォードの自宅で、その２人一緒に２時間以上インタビューした。2013年８月12日、AF単独でさらに２時間インタビューした。また、SGTの父親T、兄AT、AFの妹BTに９月５日、電話でインタビューし、９月６日、クリオ語通訳者のフランシス・ホートンを通じて、SGTの母親TUと様々なことをインタビューした。2013年９月7-8日の週末、ホートンがAFの妹に電話し、その会話内容をEメールで送ってきた[5)]。そして彼らの家族、友人知人等のシエラレオネでの状況に関する情報をEメールで集めた[6)]。

AFが追加陳述書で言及しているように、シエラレオネに送還されれば彼女の娘達をFGMから守ることができないといったAFが送還を恐れている理由に限って意見を述べ、FGMに関する事実を審判所に提示する。それは、FGMの普及、政策面の影響、FGMの慣習によって富を得ているソウェイやボンド悪魔達を「排除しろ」という反対論を含め、ほぼ全国的にFGMを継続させる原因となっている慣習をとりまく信仰についてである。

4）氏名及び電子メールアドレスの列挙は翻訳者が削除した。
5）「私はA Fの姉妹のうち２人と連絡を取った。以下は彼女達が話した内容であり、彼女達が喋っている間に書き起こしたものだ。」2013年９月９日（月）付け、フランシス・ホートンからのEメール。
6）シエラレオネの電話番号の列挙は翻訳者が削除した。

シエラレオネにおけるFGMの普及率

国連難民高等弁務官事務所（以下、UNHCR）ガイドラインによると[7]、FGMはアフリカ大陸の29ヵ国で実施されている[8]。FGMがほぼ全国的に実施されている（少女や女性の85%以上）のは８ヵ国であり、国連児童基金（以下、UNICEF）によると「シエラレオネはその１国で、15-49歳の少女や女性の88%が女性器を切除されている[9]。」

スウェーデン公衆衛生科学局グローバルヘルス課カロリンスカ研究所は「シエラレオネは国家がFGMを禁止しておらず、全国で普及する７ヵ国の１国である。2005年はFGM普及率を94%と推定した。2008年は、91.3%の普及率であった。2010年は15-49歳で88.3%の普及率だった[10]。」と報告した。UNICEFは以上の調査結果をより最近の調査でも裏付けた。2011年は88%と推定した[11]。2013年の普及率は同様に88％であった[12]。

民族的背景とFGMの普及率

シエラレオネにおいてFGMは主にキリスト教徒で英語話者のクレオール族を除く16の全民族集団で実施されている[13]。1970年代まで、クレオール族は少数派であったが、シエラレオネの政治構

7） UNHCR 2009. Guidance Note on Refugee Claims Relating to Female Genital Mutilation [Online]. Geneva: UNHCR, Protection Policy and Legal Advice Section, Division of International Protection Services. : http://www.refworld.org/docid/4a0c28492.html [Accessed: 5/9/13].

8） WHO 2008. Eliminating female genital mutilation, an interagency statement: OHCHR, UNAIDS, UNDP, UNECA, UNESCO, UNFPA, UNHCR, UNICEF, UNIFEM, WHO [Online]. Geneva: WHO, p.1. : http://www.un.org/womenwatch/daw/csw/csw52/statements_missions/Interagency_Statement_on_Eliminating_FGM.pdf[Accessed: 20/8/13].

9） UNICEF 2013. Female genital mutilation/cutting: a statistical overview and exploration of the dynamics of change [Online]. Geneva: UNICEF. : http://www.unicef.org/media/files/FGCM_Lo_res.pdf [Accessed: 20/08/13].

10）Bjälkander, O. 2013. Female Genital Mutilation in Sierra Leone [Online]. Stockholm: The Department of Public Health Sciences, Division of Global Health, Karolinska Institutet. : http://publications.ki.se/xmlui/bitstream/handle/10616/41373/Thesis_Owolabi_Bjalkander.pdf?sequence=4 [Accessed: 15/8/13].

11）UNICEF 2013. At a glance: Sierra Leone [Online]. New York: UNICEF Statistics. : http://www.unicef.org/infobycountry/sierraleone_statistics.html. [Accessed: 08/08/13].

12）supra note n.6.

13）クレオール族の起源について説明する。船一隻分の「貧しい黒人」が英国プリマスを離れ、西半島に位置する「フリータウン」と呼ばれる場所に上陸した。シエラレオネは植民地として1787年に設立され、最初はシエラレオネ会社によって運営された。米独立戦争で英国側として戦った元奴隷で、カナダの英国人によって土地を与えられた「ノバスコシア」に、西インド諸島から逃亡した奴隷「マルーン」も加わった。1812年以降、英国人が新世界への途中で船から救出した奴隷も加わった。この多様な入植者がクレオール族として知られるようになった。彼らは共通語としてのクリオ語と共に英語を話した。クリオ語は全シエラレオネ人の共通語となった。熱帯の病気が原因で、ほとんどの英国人は植民地に長く滞在できなかった。よってクレオール族の開拓民は公務員や事務員、教師、聖職者として西アフリカの植民地中で雇われた。クレオール族はキリスト教で、一夫一妻制、英国法制度での結婚を採用した。彼らはシエラレオネ「先住民」を「未開の野蛮人」とみなした。Harrell-Bond, B.E. and David Skinner, 1977, ‘The Distinction between ‘Native’ and ‘Non-Native’ in Sierra Leone Law’, Commonwealth Law Bulletin, Vol. 3, No. 4:697-703; Skinner, David, and Barbara E. Harrell-Bond, 1977‘Misunderstandings arising from the use of the term ‘Creole’ in the Literature on Sierra Lone’, Africa, 47 (3)。どのようにしてクレオールという言葉が出現し、どのように誤用されたかを学ぶことができる。この誤解は船から逃亡した奴隷の中のムスリムの人数を考慮していないために起こる。彼らは彼らの宗教を維持したが、植民地の支配「階層」に加わった。今日のシエラレオネでは、クレオールは民族への所属ではなく社会階層を示すために使われる言葉である。ある程度の教育レベルに達し、英国の生活スタイルを採用した人は、たとえ彼らの先祖がシエラレオネの16民族のどれか、又はいくつかの系譜を持っていたとしても、クレオール族とみなされる。民族性は「柔軟」で、シエラレオネ人は文脈によって彼らのアイデンティティーを切り替える。北アイ

造で支配的な社会階層であった[14]。そのころから、シエラレオネの権力はメンデ族やテムネ族の政党が握っていた。

AFはCTと新しく生まれた妹TT[15]の母でありコノ族である。コノ族はシエラレオネで４番目に大きい民族である。彼らは主に北東部のコノ地方に住み、シエラレオネの全民族中で最も発展していないと見なされている[16]。文化人類学者のフアンバイ・アフマドゥ博士[17]は彼女自身を、「女性（及び男性）の儀式と『割礼』が制度化され、それが文化と社会の中心的な特徴となっている民族コノ族出身である」と述べた[18]。そして「コノ族の全女性は切除、つまり陰核と小陰唇の除去を行っている」と名言した[19]。

SGTはCTと新しく生まれた妹TTの父であり、シエラレオネで最大のメンデ族である。彼の家族はシエラレオネ南東部のメンデの中心地域に位置するボーに住んでいる。メンデ族の少女及び女性達は、思春期を迎えると秘密社会へ仲間入りする[20]。メンデ族の少女達は「２つは両立できない。家族は学費の支払いや教科書の購入にお金を払うよりも、儀式にお金を払うほうを好む。」と、学校へ行くより秘密社会に加入することが重要と述べている[21]。

シエラレオネの現在の政治におけるFGM

シエラレオネはFGMを禁止する法律を有していない数少ないアフリカの国の１つである。これは、女性の有権者によるFGMの普遍的な支持と密接に関係すると言われている[22]。主に外部ドナー

ルランドの激しい抵抗運動のように、1961年のシエラレオネの独立交渉の際、クレオール族は彼らの「母国」である英国から切り離されることに反対した。

14）1970年代末、与党テムネ党とAPC党の指導者であるスフカ・スティーブはクレオール族を行政と司法のトップの地位から追放した。英国と米国で雇用が保証されているおかげで、多くのクレオール族が国を離れることができたため大量殺人は免れた。それ以来、政治はSLPP党のメンデ族とAPC党のテムネ族によって支配された。

15）彼女は2013年９月６日に生まれた。

16）シエラレオネ北部と東部は交通手段がないために孤立している。線路は1897年から1976年まであったが、シエラレオネのこの部分までは届いていなかった。（過去の線路の地図は以下参照http://en.wikipedia.org/wiki/Rail_transport_in_Sierra_Leone）「教育水準について東部地域は国内最悪レベルだ。男性（15歳以上）では平均４年未満の教育が達成されているが、女性では平均２年未満である。コノ地方の識字率は22.8%と推定される。全国一律の初等教育は、この地域では2004年には6-11才と12-14才の年齢層の子どものうち約25%が学校に行っていなかったために、大変困難な状況にあった。このような子ども達のほとんどが学校に一度も出席したことがなかった。多くの子ども達が学校へ行くことになったが、残念なことにすぐに中退してしまった。本来の学年よりも下の学年にいる子ども、特に女子生徒は中退する傾向にあった。女子生徒は特に学校や両親からの支援がないため、結婚を理由に中退する。」(The IBIS Education for Development, IBIS in Sierra Leone, Education for Change Programme, 2009-4014 (http://ibis.dk/sites/default/files/PDF%20global/Sierra%20Leone% 20PDF/sierra_leone_education_tp.pdf). [Accessed 07/08/13])

17）Ahmadu, F. 2000. Rites and Wrongs: An Insider/Outsider Reflects on Power and Excision. In: Shell-Duncan, B and Hernlund, Y. (eds.) Female “Circumcision” in Africa: Culture, Controversy, and Change. London: Lynne Rienner Publishers, p. 283. 彼女の家族はコノ族出身だ。彼女の母は、同様に米国に住んでいるが、敬虔なキリスト教徒だと説明されているにもかかわらず、彼女の娘達をFGMの儀式のためにシエラレオネに戻した。大学生の時、フアンバイ・アフマドゥは自ら進んで通過儀礼を受けるためにコノに帰省したようだ。

18）*ibid*.

19）*ibid*., p.284.

20）‘Sierra Leone: Are Rights Campaigners Losing the Fight Against FGM?,’ Concord Times Freetown, http://allafrica.com/stories/201108291464.html). [Access 08/09/13].

21）Gruenbaum, E. 2008, Patterns of Female Genital Cutting in Sierra Leone: A preliminary study [Online]. California, UNICEF Sierra Leone, Child Protection, p. 27. : http://www.unicef.org/wcaro/wcaro_SL_fgm_May_2008.pdf [Accessed: 08/08/13].

22）supra note n.6, p.16.

から資金を供給されるFGMの根絶を推進する取組が欠如し、シエラレオネが人権条約に未批准というわけではない。シエラレオネは、国際人権条約の締約国である。例えば、女性差別撤廃条約、子どもの権利に関する条約、社会権規約、バンジュール憲章が挙げられる[23]。上の全条約で、FGMは健康及び身体が健全である権利、女性への差別、子どもへの有害性等、国際的人権侵害であるとみなされている[24]。さらに、国連ではFGMは少女及び女性に対する人権侵害と定義しており[25]、2012年に世界的にFGMの行使を禁止する決議を採択した[26]。

NGOは、FGMがもたらす健康被害やFGMが女性の人権を侵害している事実を情報公表しているが、FGMを根絶させる一般人に向けた活動は極めて少ないうえ、ほとんど組織的に行われておらず効果は非常に薄い[27]。マグバコら（2010）は、「FGMが、シエラレオネの秘密社会内で行われていることで根絶活動はより困難になっている。シエラレオネがFGM根絶の戦いにおいて「初期段階」とされているのはこのためである。」と述べている[28]。

有名な地元の反FGM/C（Female Genital Mutilation/Cutting）の運動家オラインカ・コソトーマスは、「女性有権者の60％以上が実際にFGMを経験している国で、政治的にFGM/Cを禁止することは困難だ。即時禁止の要求は自殺行為だ[29]。」全人民会議党出身の政治家は、少女や女性のためにFGM根絶を支持すれば票を失うと述べた[30]。シエラレオネ政府は「一般市民の支持がなければ、伝統的慣行の禁止に非常に消極的だ。市民からの政治的圧力がなければ、政府関係者は行動しないだろう。」[31] こうして、FGMはほぼ普遍的に続けられる。

内戦後、ボンドの影響力が増している。内戦前、私がシエラレオネに滞在していた頃、ソウェイやボンド悪魔は、通過儀礼の場を除いて公に現れることはなかった[32]。しかし、今日「伝統的な赤と白で塗られたマスクをした女性（一般的に「ボンド悪魔：悪魔と契約を結んだ者達」と呼ばれる）を政治集会で見ることは非常に一般的だ。そこでは、大統領、政党、候補者のために踊ることもある。これは秘密結社がいまだ無視できない力を持っており[33]、政党が危険を覚悟で何らかの改竄を

23）*ibid*.
24）Mgbako, C. et al. 2010. *Penetrating the Silence in Sierra Leone: A Blueprint for the Eradication of Female Genital Mutilation* [Online]. Cambridge, Massachusetts: Harvard Law School, Human Rights Journal. 23:116-117: http://harvardhrj.com/wp-content/uploads/2010/10/111-140.pdf . [Accessed: 06/08/13].
25）世界保健機関(WHO) は、FGM を「非治療的理由により女性外性器の一部又は全体の切除や、女性性器その他の損傷を含めたすべての処置」と定義している。WHO. 2013. *Classification of Female Genital Mutilation* [Online]. Geneva: WHO. : http://www.who.int/reproductivehealth/topics/fgm/overview/en/ index.html [02/09/13].
26）UN Women. 2012. *United Nations bans female genital mutilation* [Online]. New York; UN Entity for Gender Equality and the Empowerment of Women. : http://www.unwomen.org/en/news/stories/2012/12/ united-nations-bans-female-genital-mutilation/ [Accessed: 15/08/13].
27）Deutsche Gesellschaft fur Technische Zusammenarbeit (GTZ) GmbH. 2007. Female Genital Mutilation in Sierra Leone [Online]. Eschborn: Supraregional Project Ending Female Genital Mutilation. : http://www.giz.de/Themen/en/dokumente/en-fgm-countries-sierraleone.pdf [Accessed: 06/08/13].
28）supra note n.21.
29）http://www.irinnews.org/report/97066/sierra-leone-the-political-battle-on-fgm-c. [Accessed: 06/08/13].
30）*ibid*.
31）supra note n.21.
32）これまで私が撮影できたボンド悪魔の唯一の写真は、1968年６月、ボーとケネマの間の「森」の奥深くにあるユフンという小さな村で行われた「成人儀礼」の時だけである。
33）実際、秘密社会は、「公に現れる」ことでさらに力を強めている。

行うことを示している。」[34)]

現在シエラレオネでは、NGOや人権活動家は、通過儀礼の年齢を18歳に上げる活動をしている。理論的には少女が自己決定できる年齢に達し、FGMについて自身で決定できるようになるまでFGMを防ぐことができる。しかし、実際には反対できる年齢より幼い年齢でのFGMを助長している。反FGMを主張するシエラレオネのNGO団体アマゾン・ウーマン・イニシアティブのリーダー、ルギアツ・トゥレイは、「これで、少女の人生が保護されるわけではない。子どもという理由で保護されたのならば、大人になった時、再びナイフの恐怖に向き合わなければならない。私達は少女だけを保護すべきでなく、女性も保護すべきだ。FGMの影響は年齢に関係なく、すべての女性を苦しめる。」と述べた[35)]。

2007年、シエラレオネ政府は、子どもの権利に関する法律を可決したが、市民の抗議の結果、18歳未満の少女にFGMを禁止する条文は削除された[36)]。

シエラレオネにおけるFGM継続の理解

FGMは少女達が大人の女性になり、ボンドの一員となる「通過儀礼」だ。その継続は文化的/宗教的、心理的、社会学的意味合いと、それに従わなかった場合の結果から理解されなければならない。

FGMは明らかに割礼をうけた個人と共同体の双方の繁栄のための犠牲[37)]

フェミニストの著者達は、FGMが性的欲求を鈍くすることから、FGM実施を男性による女性の抑圧の象徴と主張するが[38)]、シエラレオネと西アフリカ全体における私の研究と現代の人類学者の研究は、FGM実施はかなり異なり、深い象徴的な意味をもつことを確かめた。私はある都会から離れた村でメンデ族の少女達の「通過儀礼」に出席した。乾燥した陰核と小陰唇は彼女達の「通過儀礼」で出された米料理のためのソースとして調理された。一張羅を着た少女達は、スプーン１杯の食事を、最初は村の年配のそれぞれの家族の長に、それから彼女達の「許婚」（又は恋人）へ、自身がそれを食べる前に提供する[39)]。通過儀礼、つまり割礼においてソウェイやボンド「悪魔」を通してのみ後世に伝えられる先祖の祝福がなければ、「女性は子を妊娠できるかもしれないが、彼

34）IRIN, 2012, *SIERRA LEONE: The political battle on FGM/C* [Online]. Freetown: IRIN. : http://www.irinnews.org/report/97066/sierra-leone-the-political-battle-on-fgm-c [Accessed: 06/08/13].
35）Email: 14/08/13.
36）supra note n.24.
37）本事実は、トーゴの会議でフランスの産婦人科医によって初めて知らされた。FGM廃絶に関するこれらの問題に立ち向かうために、彼女は子どもの死亡率と不妊の危険性に焦点を当てることから始めた。アフリカの女性にとって不妊になること以上に呪われることはない。彼女達はしばしば呪術の犠牲者となる。
38）男性への聞き取り調査において、女性が絶頂期に達して満足を得るまで勃起を維持するのは大変だと話す人もいたことから、本概念に異議がある。
39）ナイジェリアのヨルバ族はこれらの体の一部を繁栄の神にささげる。

女の子ども達は死産や慢性的な病気であるかもしれず、長く生きられないかもしれない。」[40)]

FGMはジェンダー・アイデンティティーのあいまいさの排除

シエラレオネ「文化」では、子ども達と閉経後の女性は中性的で、社会的に中性的ジェンダーだとみなされる。人間の体を生まれながらにして「男性」「女性」という二つの性の区分に分ける西洋の文化と違い、シエラレオネの人々は異なる存在論的な身体の理解をしている。つまり幼児ととても幼い子ども達は「自然」で、存在論的に「文化」以前のものだ[41)]。より簡単に説明すると、子ども達は通過儀礼の前「ジェンダー」を持たない。通過儀礼は男性と女性による社会文化的な構造にとっての儀式であり、性器切除は肉体的、心理的、中性的超自然的な変化をもたらす重要な方法だ[42)]。少女達は女性になるために儀式を受けなければならない。・・・象徴的な死を経た後、儀式を受ける若者は子宮の象徴である神聖な小さな森に入る。そこで彼女達は割礼され明確な性を与えられる。彼女達が儀式を受けている間、彼女達はまだどっちつかずの状態のままだ。大人の（女性の）世界において、完全に社会的一員である新しい人物として、彼女達は儀式的に「生まれ変わ」り、比喩的に言うと神聖な小さな森の「膣」から取り出される[43)]。

陰核を切除することにより、さもなければ成長してしまうかもしれない男性のような付属物を排除する。お前の母親の陰核は緑のヘビほど長い、と言われることは深刻な争いを導く侮辱である。少年達は割礼を受け、ポロ（男性秘密社会）に加わることにより、男性になるための同様の過程を経験する。（男性版ボンド[44)]。これら二つの秘密社会は「自然の状態である若い子ども達から、（はっきり異なる）社会文化的な女性と男性を『創造すること』に対してそれぞれに責任がある」。）[45)]

FGMは女性が自慰よりも夫婦間の関係を望む保証

もし陰核が切除されなければ、少女が男性との性的関係よりも自慰を好むようになる危険性がある。それは子どもを作らないかもしれない点で危険だ。もし切除せずにそのままにしておくと、陰核は陰茎のように成長を続け醜くなり、絶え間ない自慰と性に対する貪欲さ、女性の繁栄力と性的特質の抑制を断定的に招くと、FGM賛成派の女性達は頑固に主張している。性的な喜びと生殖は密接に関係している。つまり、前者は後者の誘因となる[46)]。

40）supra note n.14, p 289.
41）*ibid*.
42）アフマドゥの文章の言い換え。*ibid*., pp.297-300.
43）*ibid*., pp.288-289.
44）今日、少年達は通常乳幼児期に病院で割礼を受ける。
45）*ibid*.
46）*ibid*. pp.297-298の言い換え。

ソウェイは彼女達の生計と共同体の財政状況をFGMに依存している

ソウェイはシエラレオネの共同体で、最も裕福な女性の場合がある。IRINは彼女達が少女にFGMを行うことで、「１人に対し200米ドルに匹敵する額」[47]を得ると報告した。ソウェイにとって、少女や女性の性器切除は生計の手段であり「もしソウェイがFGM/Cの実施をやめれば、ソウェイの収入は枯渇するだろうと彼女達はIRINに伝えた。」[48] 2002年に、シエラレオネ難民がギニアからシエラレオネへ帰還する準備をしていた時、ボンドの指導者達は、割礼を受けていない少女達と女性達を集めた。それは帰還に先立って割礼がなされていることを確実にし、生殖能力を保証するためであった。

女性の力とFGM

シエラレオネの地方での「伝統的」政治構造は、男性社会と女性社会は互いに住み分けがされていることを含め、政治権力行使の際に均衡と抑制が働く点で注目すべきだ。少女が女性の力をどのように、どこで行使するかを学ぶのは、ボンドに加入する儀式の最中である[49]。

ソウェイは強力な指導者達であり、より広いコミュニティの中で「尊敬される階級」[50]の一部だ。儀式を受けた女性は、集会や祭典に自由に行き来することができ、「儀式の指導者達が持つ超自然的力を男性に対して用いることを楽しみ、女性の権威、特に、母や祖母の権威の正当性を得る。」[51]

女性は「呪術」の「極意」を操り、男性の性的不能を引き起こすこともできるため恐れられている。性的不能に対する男性の恐れは、「呪術」の脅威に対抗するための護符や呪術的儀式で証明される[52]。バイアグラが販売されるよりずっと前から、西アフリカの至るところで、性的不能を治すと言われていた医薬品が発売されていた[53]。一夫多妻の家庭では、夫はそれぞれの妻に平等に性的関係を持つ機会を保証しなければならならず、通常３日ごとに交代で行われる。それぞれの妻との性交に失敗すると、夫は公に恥ずかしめを受ける対象にされる可能性が高い。

女性の月経血は危険だ。月経血が男性性器に触れると、性器が小さくなってしまうからだ。屋内

47）supra note n.31.
48）*ibid*.
49）例えば、女性は男性がいる間は静かにしていなければならない。一方で、女性は「男性を家に留めておく」ための呪術を持っている。
50）supra note n.31.
51）ボンド内の階級制度は、義理の母や高齢の女性、特に、ボンド悪魔又はソウェイという儀式の指導者らに対して、若い女性が服従することを強調している。
52）これは、ウサマン・センベムが作成したXalaという映画の主題である。(http://voices.yahoo.com/xala-review-film-curse-80206.html) しかし、彼の映画の中では、浮浪者は大臣の妻や娘がいる前で唾を吐く屈辱を与えて大臣を性的不能にしたり、治したりできた。
53）バイアグラが販売されるよりずっと前から、西アフリカの至るところで性的不能を治すと言われていたいくつかの医薬品が発売されていた。私は、現地調査中、イギリスやフランスで作られたこれらの多くの製品を収集した。車に乗ることはめったになかったが、男性の所有者はアタッシュボックスの中にこっそりとそのような製品を隠していた。

外でトイレを共用する所では、「茂み」の別の場所を使う以前の慣行とは大きく異なるが、女性が誤って（あるいは意図的に）月経布をトイレで洗濯した後、乾燥させるために置いておくことがある。男性にとって、ただこれらの布を見るだけでも危険だ。通常、男性は女性の力が及ぶ範囲のボンドに口を挟まない。実際に、FGMやボンドについて、公共の場で又は男性の間だけであっても話すことは、多かれ少なかれタブーの対象であり、男性にとって恥である[54)]。

近代化はFGMの儀式から結婚までの「自然な」流れの妨害

かつて、FGMは少女が初潮を迎えた後すぐに行われ、儀式は結婚後に続いて行われた。近代の教育は婚姻年齢を遅らせている。少女は割礼が行われるまで処女のままでいなければならない。その結果、さらに若い年齢でボンドに加入することを許すように、両親に圧力がかけられた。ボンドに加入すると少女は未婚にもかかわらず、自由に性交ができる。娘が結婚するまで処女を維持（非嫡出子の出生を防ぐ）することを望む「良識のある親」は、ボンド加入は、教育終了まで待つべきと主張する[55)]。こうした理由で、大学生でまだ割礼されていない少女を見つけたのである[56)]。

少女に対するボンド加入への社会的な圧力

これまで見てきたように、FGMをめぐる価値観や信念は、「文化的」だけでなく宗教的でもある。ボンドに加入させる圧力は精神的であり、「社会的」でもある。最大の懸念は、少女が18歳になるまでFGMを遅らせる取組みの影響である。この取組みによって、赤ん坊にさえ割礼が行われることになる。

シエラレオネの村々は、直接顔を合わせる社会だ。コミュニティ全員が他の全員を知っていることを意味する[57)]。男性と女性の社会的関係は、男性秘密社会と女性秘密社会の構成員により組織づけられる。個人が村社会に、「所属」しないで暮らすことは不可能だ[58)]。割礼を受けていない女性は、結婚できないという強い信念は、少女にFGMを受けさせる別の圧力となっている[59)]。

誘拐され、強制的にボンドに加入させられる少女達は多数いる。例えば私が証人を務めているクレオール族の女性の例では、彼女は義理の姉に唆され、父の村に旅行に行かされた[60)]。途中まで来

54）同様にポロという男性「秘密」社会は、女性には「立ち入り禁止」となっている。(‘The political function of the Poro’, Africa, Vol 35, No. 4, October 1965; Vol. 36, No. 1, January, 1966.)

55）「コノ族では中等学校や大学に通う女性でさえも割礼を受けている」。Shweder, R. A. 2011. What about “FGM”? And Why Understanding Culture Matters in the First Place’, in Moseley, W.G (ed.), Taking Sides: Clashing Views on Controversial African Issues, London: McGraw-Hill Higher Education Publishers. pp.195-196.

56）Harrell-Bond, B.E., 1975, Modern Marriage in Sierra Leone: A Study of the Professional Group, Mouton: The Hague.

57）よそ者を全体のコミュニティに取り入れるための厳格な儀式がある。もし何かが無くなった場合に、誰に責任があるのかをはっきりさせるためである。

58）あらゆる異常な行動が魔術と結びつけて考えられるだろう。

59）supra note n.7, p. 52.

60）彼女の父はリンベ族で、クレオール族の家族に育てられ、クレオール族の女性と結婚した。

た時、ある女性が村で何が計画されているかを彼女にこっそりと告げた。彼女は車からの脱出に成功したが、フリータウンに戻るために、時計を売らなければならなかった。2013年５月、10代の強制的FGMの例を、「女性グループが少女をボンドに加入させようとしたが失敗し、少女はコノの東部にある村から逃亡した。」[61] と報道された。

学校に通う少女達は、同級生からボンド加入への強い圧力に晒されている。ボンド加入は、少女達が大人の女性になることを祝う、共同体全体にとっての行事だ。祝祭への参加は、多くの家族と共同体の人々にとって慣習だ。ほとんどの少女達は、彼女達の体の一部が切除されることに事前に気づきにくい。アフマドゥが説明しているように、「茂み」に入るより前、多くの人々が永遠に続くかのように踊ったり、歌ったりして、私達新入りが現れるのを待っていた[62]。私達が現れると、多くの女性達が叫び、走ってきて取り囲んだ。・・・私は妹を心配したが、彼女はみんなの注目の的であることを楽しんでいた。私達に何が起きようとしているか「知っていた」が、母が私に「自身の口から」伝えられなかったように、私も同様に妹を怖がらせることを恐れ彼女に伝えることができなかった。最初の儀式の食事は叔母イェイの家で用意された。それは苦くまずかったが、私達を守るための「重要な薬」が含まれていると言われ、全て食べるようにと注意を受けた[63]。

少女達は傷が癒えるまで「秘密の森」という離れた場所で「教育」を受けた後、終了の儀式の時、白いチョークで化粧し、共同体に歓迎されて現れる。彼女達は贈り物や家族や友人からの祝福の言葉をもらい、さらに祝宴に一張羅を着て出席する。

AFとSGTの家族のFGMとCTとTTの通過儀礼に対する態度

私がAFとSGTにオックスフォードでインタビューした時、彼等２人は娘にFGMを行わせない決意を家族に伝えていなかったことを認めた。AFは次女の出産予定さえ姉に伝えていなかった。私は姉にその場で電話するように提案した。

AFは姉KFに電話し、次女の出産予定を伝えた後、私を紹介し、私がボンドについて彼女と話したがっていると伝えた[64]。KFは怒りを爆発させ「これは私達の文化だ」と言うのが聞こえた。私はクリオ語が流暢でないため、次回AFがオックスフォードを再訪する際、再び電話することを提案した。その後９月６日に、クリオ語の通訳者フランシス・ホートンと共に電話したが、AFの姉にはつながらなかった。しかしSGTの母TUと姉BTと電話で話すことができた。

SGTの姉BTとの電話中、彼女はFGM反対の意見であるようだった。自己決定ができる年齢の18才までFGMできない法制定に賛成した。しかし彼女の１人娘については、娘に「自分で決める」

61）Cham, K. 2013. Sierra Leone teenager flees to avoid the cut [Online]. Freetown: Africa Review. : http://www.africareview.com/News/Sierra+Leone+teenager+flees+to+avoid+the+cut/-/979180/1848504/-/o0t6yh/-/index.html [Accessed: 22/08/13].

62）アフマドゥは訓練を受けた看護師により麻酔を受けため、他の加入者より大変恵まれていた。ソウェイが彼女を切ったが、施術は通常錆びたカミソリを使って行われるところ、彼女には消毒された道具が使われたと推定できる。

63）Ahmadu, F. op. cit, pp. 290-291.

64）私はスピーカーフォンを持っていた。

ことを許すにも関わらず、「皆がやっている」ので、娘はボンドに加入することになると言った。BTは娘が周りに説得されることを期待しているのだ。

一方、SGTの母TUとの別の会話で、驚くべきことに彼女はFGMに不賛成だが、BTとBTの夫の間にFGMについて意見の相違があることを明らかにした。しかし彼女はBTの夫の意見が優勢だと思っていなかった[65)]。私達がTUにSGTとAFはCTとTTをFGMから守ることができるか尋ねると、彼女はただSGTとAFは「ロンドンに留まる」べきだと繰り返し述べた[66)]。一方AFの姉は、そのようなことは一切話さなかった。

ホートンはAFの姉SFとFFに、2013年９月８日、ロンドンから電話した。彼女は博士のために電話したと述べた[67)]。AFが娘をボンドに加入させることを許すつもりはなく、それが英国に残りたい理由だと説明した。ホートンはAFの姉達との会話を私に報告した。「私にとり会話は大変難しかった。彼女達はただ話し続け、私はただ書き留めるだけだった。唯一『AFがシエラレオネへ娘達を連れ帰ることをどう思うか』と尋ね、彼女達は話し続けた。

コノに住んでいるAFの姉SFは、以下のように答えた。:

これは私達の文化である。2-3歳の子どもでさえ儀式を受け、時には生後３ヵ月の子どもでさえ儀式を受ける。AFの娘達も例外ではない。AF自身もボンドに加入した。AFが不賛成でも文化だから、儀式を受けさせなければならない。私の娘達もボンドに加入した。もしAFが望まないならば「英国の女性」だから、英国に留まるべきだ。私達は男性に対しても、彼らの背中を首まで傷つける儀式を行う。AFの娘達を笑われたくない。儀式を受けていない子どもを笑い者にすることはよくある。大臣は秘密の森を作るためにお金を与えてさえきた。今この瞬間にも、少女達は茂みの中で儀式を受けている。AFの娘達は笑い者にされ、共同体の中で仲間として認められないだろう。儀式を受けた者のみが有力者と結婚できる。たとえAFが娘達を隠しても、私達は見つけ出して儀式を力づくで行う。子ども達は時々逃げるが捕まえられる。

ホートンはAFの姉でフリータウンに住むFFとの会話を報告した。FFはこう言った。:

もしAFが娘達を連れ帰ったならば、私達は儀式を強制する。彼女達が来るのと同時に、彼女達を捕えて儀式を施す。それは私達の文化で妥協しない。政府は強制的に儀式を施すことを認めている。たとえ子どもがそれを望まなくても、英政府が賛同しなくても実行する。AFのどの子どもも、「秘密」に加入しなければならない。AFの娘だからという理由で、私達は文化を変えるつもりはない。彼女の子どもは他の子どもと同じだ。

65）私の友人の１人は、高い教育を受けたテムネ族で、彼の娘を彼や彼の妻の家族が誘拐しようとした時、民事訴訟で彼らを脅したことがあるが、娘を守る唯一の手段は、イギリスの寮制学校へ入学させることだと私に述べた。幸運なことに、彼は1970年代にイギリスの大使に任命され、これを実行できた。

66）BFと彼女の母TTはコノとフリータウンの状況は同じだと言っていたが、どちらもボーに住んでいる。

67）オックスフォードの私の自宅からAFがKFに電話した際、SFとFFは博士の名前を聞いたので、すでに博士のことを知っていた。

FGMに関する裁判例

FGMに直面するシエラレオネの少女に関する英国でのリーディング事件は、2006年のフォルナー対内務大臣事件だ[68)]。申立人は、「特定の社会的集団の構成員」つまり、「FGMを受けておらずボンドに加入していない女性」であるという理由で難民として認められた。

他国の裁判所でも、多くの事例が蓄積されてきている。娘達をFGMから守る理由で、両親が難民として認められている。例えば、ベルギー外国人争訟院（2009年３月26日 No. 25092 X事件第５法廷）は、ギニア人の父が、送還された場合、娘がFGMを強制される恐れがある理由で難民として認められた[69)]。彼は、「政治的意見」に基づき難民認定された[70)]。

2013年のKら（FGM）ガンビアのCG対内務大臣事件では[71)]、FGMを行うことに反対しているにもかかわらず、ガンビアに送還されればFGMを強制される恐れが理由で難民申請をした２組の申立人の主張が認められた。１つ目の事件は、両親とその娘達が難民申請を行ったもので、２つ目の事件は、ガンビアの少女が１人で行った事件だ。

2012年のアベイ対アシュクロフト事件（米国第６巡回区連邦控訴裁判所判決）では[72)]、子どもがFGMを強制される恐れがあったために、その親が難民として認定された。本連邦裁判所判決では、娘にFGMが施された場合、予想される精神的苦痛を避けることを親は請求できることを認めた。裁判所は、娘にFGMが施されれば、エチオピア人の母親は、迫害を構成するのに十分な精神的苦痛を被るであろうと結論づけた。本主張も子どもがFGMを強制される恐れがあることを理由に認められた。

2009年のK及びD（FGM）対フランス（国内庇護裁判所）[73)] では、未成年である申立人Kと母親Dが、フランスで難民認定を申請した。その申立は、Kが出身国のマリに送還されればFGMを強制される恐れ、また、母親がFGMから娘を守ることができない恐れの主張に基づいていた。裁判所は、申立人がマリに送還されれば、出身国政府から保護を受けることができず、未成年であることを理

68）UK - House of Lords, 18 October 2006, Fornah v. Secretary of State for the Home Department (linked with Secretary of State for the Home Department v. K) [2006] UKHL 46, <http://www.publications. parliament.uk/pa/ld200506/ldjudgmt/jd061018/sshd-1.htm>. [Accessed: 20/05/13]

69）ギニアでは、95％の女性が性器切除に苦しんでいる事実が考慮された。ギニアでは、FGMは拒むことのできない「先祖代々伝わる慣わし」である。FGMを拒んだ人は追放され、共同体から排除される。自分の子どもがFGMに苦しむのを見ているしかない。裁判所は、子どもの権利がFGMによって侵害された場合、親に原告適格を認めた。これは親に、子どもが痛がったり、苦しんだりする様子を無理やり見せたり、FGMに反対することで迫害を受ける恐れをおかさせたりする場合も含む。裁判所はFGMを理由とした難民認定申請に関するUNHCRガイダンス文書を参照した（2009年５月、８頁）。

70）Conseil du contentieux des étrangers arrêt n° 25.092 du 26 mars 2009 dans l'affaire X / Ve chambre http://www.intact-association.org/images/stories/documents/jurisprudence-crainte-parent/CCE-25-06-2009-crainte-excision-sa-fille.pdf.

71）K and others (FGM) The Gambia CG v. Secretary of State for the Home Department, [2013] UKUT 00062(IAC), United Kingdom: Upper Tribunal (Immigration and Asylum Chamber), 8 April 2013, : <http://www.refworld.org/docid/5163e5204.html>. [Accessed: 16/05/13].

72）Abay v. Ashcroft, 368 F.3d 634 (6th Circuit, United States) [2012]. 2004 FED App. 0145P (6th Cir.) File Name: 04a0145p.06 : http://www.refworld.org/cgi-bin/texis/vtx/rwmain?page=search&docid =40b30ae14&skip=0&query=abay [Accessed: 16/05/13].

73）Miss K and Miss D (FGM) v. France (CNDA - National Court of Asylum) [2009]. : http://www.asylumlawdatabase.eu/en/case-law/france-cnda-plenary-session-12-march-2009-miss-k-n°-639908-and-ms-d-n°-638891 [Accessed: 16/05/13].

由にFGMを強制されるおそれを認め、彼女の母親も子どもは母親と別々に暮らすことができない理由で、難民として認められた。

2002年のンワオコロ対米国移民帰化局（米国第７巡回区連邦控訴裁判所判決）[74]では、申立人（ンワオコロ）は、娘がナイジェリアに送還されれば、FGMを強制される恐れを理由に難民として認められた。ンワオコロは、1980年代初旬に、合法的に米国に入国し、２人の息子と１人の娘を産んだ。1996年以降、米国の滞在許可を得ようと努力した。2002年に行った最終申立は、その後２人目の娘を産んだが認められた。

国内避難可能性又は移住の選択可能性

国内避難又は移住の選択可能性は、CTとTTの家族にとって実行可能な選択肢ではない。クレオール族を除きシエラレオネの全民族がFGMを行っている。それらの民族間で、FGMはほぼ全国的に行われており、15-49歳の女性のうち84-98％がFGMを受けている[75]。

首都がフリータウンになって以降、全民族の人々が移動し、国の各地やフリータウンに住むようになった[76]。フリータウンでは、民族は「部族の首長」を中心に組織されている[77]。民族が異なるボンドは、フリータウンにおいて拡大していった[78]。AFやSGTがフリータウンを含め、シエラレオネのどこに住もうと親戚や知人の誰かが彼らを見つけ出すのは容易だ。

UNHCRガイドラインによると[79]、

パラグラフ28

FGM事件において国内避難可能性又は移住の選択可能性の有無を決定する際には、どのような選択可能性が適切であり、かつ、合理的であるかを決定する必要がある。申請者が全国的に（又はほぼ全国的に）FGMが行われている国の出身である場合、国内避難可能性は、一般的には適切な選択可能性としては考えられない。他のジェンダーに基づく迫害の場合と同様、FGMは大抵民間人によって行われている。国家の一部において、効果的な国家による保護が欠如している場合、国家は別の場所においても、少女又は女性を保護する能力がない、若しくは、保護する意

74）Nwaokolov. INS, 314 F.3d 303 (7th Circuit, United States) [2002]. United States Court of Appeals, Seventh Circuit. No. 02-2964. : http://www.uniset.ca/naty/maternity/314F3d303.htm [Accessed: 16/05/13].

75）supra note n.4, p. 14.

76）Harrell-Bond et al. Community Leadership and the Transformation of Freetown (1801-1976), Mouton: Leiden

77）1927年時、コノ族の首長がフリータウンで政権を握っていた（*ibid*. p.173）。1936年時の首長名は、ンガレイだった（*ibid*. p.146）。

78）シエラレオネで反FGM活動を指揮する活動家は、現在のFGMに関し、子どもの通過儀礼は全国的に普及する状態が続いているとメールで述べた。彼女は、「フリータウンであっても、少女に対してFGMが行われている。キシー・オールド・ロード沿いでも同じだ」と述べた（email 8/8/13）。私がフリータウンに住んでいた頃（1967-1973年）、私の家は上流階級が住む海に近い地域にあったが、ボンドはすぐそばに存在していた。15歳だった私の娘は、「郷に入っては郷に従え」という人であったので、キロ語とメンデ語を学んでいた。彼女は、地元のソウェイと仲良くなり、ボンドの踊りを教えてもらっていた。安産祈願のお守りを入手するため、地元の「護符」を扱う男性を訪ねてもいた。私は自分が「奥地」に調査しに行っている間に、娘が誘拐されFGMを施されるのではないかと大変心配した。娘とその面倒を見ていた18歳の兄に私が行った注意が十分であることを祈るしかなかった。

79）UNHCR. 2011. Guidelines on International Protection. In Handbook and Guidelines on Procedures and Criteria for Determining Refugee Status. Geneva: UNHCR. pp. 106-113.

思がないと考えることができる[80]。

パラグラフ29

FGM事件において国内避難可能性は、FGMが一般的に行われていない国又は全国的に行われていない国の場合、意思決定者によって主に検討されている。例えば、女性又は少女が農村から都市部へ移動したならば、移動した先で保護されない恐れ、迫害の主体に接触する可能性を含めて十分に検討しなければならない。

結論

シエラレオネに送還されれば、CTとTTは性器切除を伴うボンドへの加入を免れない、というのが私の確固たる意見である。FGMの健康被害は広く報告されているため、それに関する裁判例を挙げるまでもない[81]。英国や他国の裁判所における裁判例は、裁判所が同じような立場に置かれた少女と両親を1951年難民条約上の難民と認めたことを示している。

1985年に、英国政府はFGMと英国籍又は永住権を持つ者をFGMのために外国に連れ出すこと、そしてそれを手伝うことも違法とした[82]。申立人は英国籍でも永住者でもないが、CTとTTはどちらも英国で生まれた。この審判だけが、FGMの危険にさらされるシエラレオネに彼女らが送還されないことを保証する。

私達はFGMがキリスト教のクレオール族を除いてシエラレオネの全民族でほぼ全国的に実施されている証拠を審判のために調査した。ソウェイとボンド「悪魔」の「権力」が内戦以降強化されているように考えられ、女性からの票の影響力が強いために政治家達がFGMに反対することを恐れていることを示した。

私達はボンド悪魔がFGMの存続に利害を持っていることを指摘した。ソウェイやボンド悪魔は性器切除を実施することで高額の報酬を要求する。

FGM撲滅運動は効果がないことで悪名高く、少女が18歳になり、「自分のことを自分で決めることができるようになる」までFGMを遅らせる法律を可決させようとしている。*しかし本法律は、少女がさらに幼い時、ひどい時には赤ん坊の時にさえ少女を割礼しようと女性達を駆り立てる恐れがある。*

私達は審判所がFGMの発端となる*呪術的宗教的理由*を理解する手助けをしたいと考えている。割礼（通過儀礼）は中性的な子どもが女性か男性のジェンダーを与えられる過程であり、陰核は切

80）*ibid*. Also section A (iv) above on Availability of State Protection, paras. 19–21.

81）FGMは「深刻な出血、排尿困難、後に、嚢腫、感染症、不妊、新生児の死亡率を上昇させる出産の際の合併症」といった結果を引き起こすだろう。FGMはしばしば精神的なトラウマを引き起こし、ひどい時には死に至る場合もある。(NHS. 2012. *Female Genital Mutilation* [Online]. London: NHS. : http://www.　nhs.uk/Conditions/female-genital-mutilation/Pages/Introduction.aspx). [Accessed: 09/09/13].)

82）UK Government, 2013, Quick Answer: Female Genital Mutilation. London: UK Government. : https://www.gov.uk/female-genital-mutilation [Accessed: 06/09/13].

除されなければ醜く成長すると信じられている。FGMは明らかに個々の女性と共同体の繁栄のための犠牲である。FGMは女性が性交よりも自慰を好まないようにすると信じられている。私の意見では、*宗教的な迫害を受ける恐れの理由*で、FGMの強制を恐れる人々を難民として認めることが適切だと考える。

私達はFGM継続のための社会的圧力、特に同級生や家族からの圧力を示した。FGMとボンドについて、いかに女性が決定権を持つかを示した。SGTの姪の祖母及び父はSGTの姉のBTよりもFGMについて否定的意見を持っているが、彼の家族でFGMを受けていない女性はいない。AFの3人の姉、KF、SF、FFは、AFの子どもに接触できるならばボンドに強制的に加入させると断固として主張している。

シエラレオネには、CT及びTTが親戚によって誘拐され、ボンドへ強制的に加入させられる危険から逃れることのできる国内避難可能性は存在しない、というのが私の意見である。全民族集団の人々はシエラレオネのどこにでも住んでいる。SGTの家族はボーの出身であるが、今は散らばって住んでいる。AFの家族はコノ出身であるが、例えばAFの姉のFFは現在フリータウンに住んでいることが確認されている。

私は本鑑定書で言及した事実について、私自身の情報であるものとそうでないものを明確にした。私の知っている事実は、真実であると確証している。私の意見は私の考える真実であり、事実に対する専門的な意見を表明している。

2013年9月13日、英国オックスフォードにて。